

フューチャーセンター「未来を創造する対話の場」

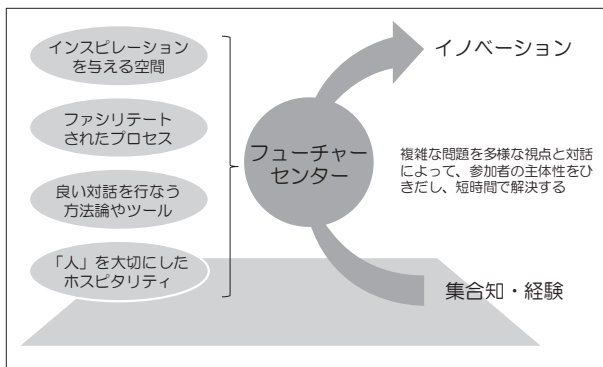
富士ゼロックス株式会社 KDI (Knowledge Dynamics Initiative)

Happiness Alchemist 堀内 一永

■フューチャーセンターとは

フューチャーセンターは、「未来を創造する対話の場」であり、企業・政府・自治体などの組織が、中長期的な課題解決を目指して、様々な関係者を幅広く集めて、協動的かつ創造的な対話を通じて、新たなアイデアや問題の解決手段を見つけだし、その実現や実践での相互協力を促します。会議室というよりも演劇の舞台のような雰囲気近くに、その場に集う一人ひとりが演者となって、これからの未来に広がる可能性を思い描きながら、にぎわいのある楽しい対話を繰り返します。その場では、ひとりで考えるよりも多くのアイデアが出てきて、こんなことも、あんなことも、みんなと一緒になら実現できるかもしれないと思えてきます。そして、自分たちが考え出した企画やプロジェクトにも愛着が感じられるようになり、その実現プロセスにも関わりたい、出来ることなら何でも協力したい、という欲求が芽生えてきます。初めての方には不思議に感じられるかもしれませんが、“人と人がつながる”ことの本来の可能性を引き出してくれる、それがフューチャーセンターです (図1)。

図1 フューチャーセンターの概念図



フューチャーセンターの場には、必ずファシリテーターと呼ばれる対話を促す演出兼進行役がいて、ゲームやワークショップなどの創造的な方法論をうまく組み合わせ、参加者全員からうまく意見を引き出してくれます。そのため、参加者自身は、その場を楽しもうとする姿勢さえあれば充分で、そのシンプルさこそが、異なる価値観や多様な専門性をもつ人々を一堂に集わせて、“人と人のつながる”確率を増大させてくれるのです。さらに、ファシリテーターが導く人間的で自然な対話のリズムは、これまで言い出せなかった素直な気持ち、解決なんてできないと諦めていた問題、大きな声で誰かに助けを求めたかったことなど、誰もが普段の生活で心に閉じ込めてしまいがちな“本音”を引き出してくれます。参加者からの“本音”の一つひとつには、滅多に出会えない貴重で現実的な深い学びが含まれていて、時間が経過

するほどに心地良さや知的な充足感を与えてくれます。これまで見過ごしていた問題に気づかせてくれたり、すぐに行動しなければならない使命感を芽生えさせてくれたりなど、その効果は参加者ごとに様々ですが、フューチャーセンターへの参加をキッカケにして、多くの人や地域社会の未来を良い方向に進ませていけるのではないかと、私たちは期待しています。

■フューチャーセンターの歴史

フューチャーセンターの起源は1990年代半ばの北欧に遡ります。当時、北欧の国々では知的資本経営 (Intellectual Capital Management) が活発に行われていました。国土が狭く自然資源が乏しい北欧にとっては、未来を創出する知的資本が豊富にあることを国際的にアピールする必要があったのです。そこで、知識経営研究のリーダー的存在だったレイフ・エドヴィンソン氏が、未来の知的資本を形成するための施設としてのフューチャーセンター構想を提唱し、スウェーデンのスカンディア保険グループに世界最初のフューチャーセンターがつくられました。そこは美しい湖畔のコテージで、施設内には発想を刺激する数々のユニークなオブジェや家具が数多く配置され、エドヴィンソン氏自身によるファシリテーションで、未来の知的資本を創造する活動の素晴らしさが伝えられました。その後のフューチャーセンターの発展は、このエドヴィンソン氏の尽力によるものが大きく、彼の活動に触発された数多くの知識研究者や経営者たちによって、次々に欧州各地でフューチャーセンターが建設されていきました。今では、イングランド、デンマーク、オランダ、フィンランド、イタリアへと広がり、40施設をこえるフューチャーセンターが欧州を中心に世界各国に広がっています。さらに最近では、世界のフューチャーセンターを横断的にサポートする機能として、“国際フューチャーセンターサミット(2005年～)”や世界各国の先進事例を集める国際委員会“Open Futures (2006年～)”が立ち上げられました。

■日本のフューチャーセンター

日本のフューチャーセンターは、弊社KDIスタジオ(六本木)からはじまりました(写真1)。企業経営のコンサルティングをしていたKDIは、労働生産性や効率性の競争で体力を使い果たしてしまう日本の経営スタイルを変えなければならないという問題意識で、知識創造で革新し続けられる次世代の経営スタイルを求め、エドヴィンソン氏のフューチャーセンターの考え方に行き着きました。P&G社がコネクト&デベロップという戦略を打ち出し、自社の技術課題を公開して解決法を募集する斬新なやり方でイノベーションのスピードを向上させたように、産業を超えた異業種との対話、セクターを越えた政府やNPOとの対話、さらには国や文化を超えた対話

が、これからの日本企業には必要であると考えたのです。そして2007年になり、KDIは自身のスタジオ内にフューチャーセンターを導入、日本企業の経営者へフューチャーセンターの意義を訴求する活動をはじめました。2009年には、フューチャーセンターを自ら実施したい、運営したいというディレクターを支援するため、フューチャーセンター・コミュニティを立ち上げました。そのコミュニティでは、数多くのフューチャーセンター・ディレクターが集い、ひとつでも多くの先進的な事例が日本で具現化できるように、フューチャーセンターに関する経験やノウハウを相互に交流させています。

写真1 KDIスタジオでのセッションの様子



欧州との違いについて、「欧州ではパブリックセクターで普及し、日本ではプライベートセクターで普及した」と言われることがありますが、日本のフューチャーセンターは歴史が浅く、民間企業のイノベーションニーズに応える目的で進めてきたこともあり、「未だパブリックセクターにまで拡大しきれていない」とする判断が正しいと思います。欧州のパブリックセクターの代表例は、LEF、Shipyards、Country Houseなど六ヶ所のフューチャーセンターを運営しているオランダ政府です。物理環境へのこだわりが強く、創造的な発想につなげるための装飾や機能を埋め込んだフューチャーセンター施設を提供していて、そこでは日常的に、複数の省庁の担当者や民間企業の担当者、市民などが集まり、分け隔てなく議論がなされています。これは日本の政府や地方自治にも必要な機能ですので、日本でのパブリックセクターへの普及は、近い未来に実現されるのではないかと思います。それに、日本のフューチャーセンター・コミュニティがもつネットワーク連携を加えれば、その波及効果は飛躍的に高まり、欧州以上に大きな社会変革や産業イノベーションにつなげていけるかもしれない、とも期待されています。

■フューチャーセンターが生み出してくれるもの

① “未来のステークホルダー”

フューチャーセンターの最大の特徴は、これからの未来に視点をおいた対話です。これからの未来に視点をおくことで、どんなに難しく、遠く離れたテーマであっても、「もしかしたら自分も関係するかもしれない」という身近さを参加者に感じさせることができます。そして、

未来で起こりうる事象の可能性、あるいは未来で起こりうる変化の可能性について、現在の立場や利害に関係なく、共に協力し合えるようになります。これが、フューチャーセンターが生み出してくれるものの1つめ、“未来のステークホルダー(未来の利害関係者)”です。フューチャーセンターでの対話により、その“未来のステークホルダー”が自然に増えていき、これまで全く関係していない人がつながったり、そもそもつながらなければならなかった人をつなぐキッカケを提供してくれたりします。企業にとっても、この“未来のステークホルダー”は、新しい顧客や新しい事業パートナーの存在に気付かせてくれるので、将来の事業拡大につながる大きなチャンスになります。

② “未来トレンド”

今日のような、複雑で変化の激しい社会的・経済的環境では、これからの未来で起こりうる変化や可能性を正しく予測することが非常に困難になっています。フューチャーセンターでは、特定個人の限られた経験や過去データに頼りすぎるのではなく、広範で多様な分野の専門家や経験者の「予見」や「洞察」に耳を傾け、参加者全員の知識や経験を加えることで、これからの未来で起こるかもしれない複数の事象を抽出していきます。事象の一つひとつは、インパクトが小さくて見過ごされてしまうものかもしれませんが、それら複数がいくつか重なって起きた場合には、大きなインパクトとなって、私たちの生活を脅かすようなトレンドに変わるかもしれません。これが、フューチャーセンターが生み出してくれるものの2つめ、“未来トレンド”です。それは、予測された通りに発生しうるかどうかを問うものではなく、私たちの生活に大きなインパクトを与えうるか否かを問うものです。「万が一にも起こってしまっただけは困る」、「見過ごすことができない」など、人間的な判断やモチベーションを加味することで、世の中の多くの人が共感してくれる“未来トレンド”が生み出されます。

■フューチャーセンターのこれから

東日本大震災を経験した日本は、人や社会の可能性を見直していかなければなりません。これからの未来への飛躍が問われています。まずは、深刻化が心配されている社会課題をテーマにして、フューチャーセンターで対話し始めてみてはいかがでしょうか。誰もが“未来のステークホルダー”となり、“未来トレンド”を自分ごととして真剣に語り合うようになれば、その課題解決のスピードは格段に早まると思います。

フューチャーセンターは、「世界は、私たち一人ひとりの関係性でつくられている」という基本思想を持っていて、私たち一人ひとりの思考や行動を変えることで、日本社会全体を良い方向へ導いていけると信じています。次のステップは、様々な大切にしたい想いをテーマにして、毎日、日本のどこかのフューチャーセンターで、にぎわいある楽しい対話が行われている状態です。ぜひ、この横浜でも。フューチャーセンターでの対話で、一人でも多くの人が横浜の未来に希望を持てるようにしていきます。